

社会貢献目標の基盤となる社会への信頼

—— 自己決定理論に基づく仮説モデルの提案 ——

西村 多久磨⁽¹⁾

本研究では、自己決定理論に基づき、社会への信頼が社会貢献目標の基盤と成り得るという仮説モデルを検証した。調査の対象は、大学生250名（男性105名、女性143名、その他2名）であり、社会への信頼を問う項目と将来目標尺度から構成される質問紙調査が実施された。潜在変数を伴うパス解析モデルに対して共分散構造分析を行った結果、社会への信頼が社会貢献目標を促進することを意味する正の関連が確認され、本研究の仮説が支持された。その一方で、理論からは予測していなかった、社会への信頼と外発的将来目標との正の関連も確認された。社会への信頼を高めることは、社会貢献目標を育む可能性が示唆されたが、外発的な将来目標をも高めるという副次的な効果も示唆され、さらなる検証の必要性が確認された。このような理論に関する発展的な議論は残されたものの、社会貢献目標の素地として、社会への信頼が存在していると結論づけることができた。

キーワード：自己決定理論、将来目標、社会貢献目標、社会への信頼、大学生

本研究は、自己決定理論における将来目標と社会への信頼との関係を明らかにする試みである。自己決定理論をふまえた上で、社会への信頼から将来目標に影響を与えることを想定した仮説モデルを作成し、これを検証する。特に、本研究で注目するのは、将来目標を構成する要因の一つである社会貢献目標への影響である。以降については、まず本研究の骨子にあたる自己決定理論と将来目標について説明し、その後、本研究で注目する社会貢献目標について述べ、本研究の仮説モデルを提案する。

自己決定理論と将来目標

将来目標とは「自分の人生全般（将来）において何を大切に生きていきたいのかに関する個人の人生価値観」のことである。この将来目標は、人々の精神的健康や成長を説明しようとする自己決定理論（self-determination theory; Ryan & Deci, 2000, 2017）における重要概念の一つであり、内発的将来目標と外発的将来目標に区分される。内発的将来目標

は、その目標を追求することが、心理的な幸福を促進する人間の基本的心理欲求の充足とその方向性が一致するものであり、特にこの理論では、自己受容（self-acceptance）、親密性の獲得（affiliation）、社会貢献（social contribution）、身体的健康（physical fitness）に関する目標が取り上げられている。一方で、外発的将来目標は人間の基本的心理欲求を補完的にしか満たすことができないものであり、金銭的成功（financial success）、外見的魅力（attractive appearance）、社会的名声（social recognition）の3つの目標が注目されている。

自己決定理論の7つの将来目標に関する研究は、Kasser and Ryan（1993, 1996）によるアスピレーションズ・インデックス（Aspirations Index）の開発から始まった。その後、この尺度は多くの国や地域で翻訳されたが、この尺度を用いた実証的研究では、総じて相対的に内発的将来目標を外発的将来目標よりも多く持っていた方が、主観的幸福感が高いという

⁽¹⁾福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: t-nishimura@fcu.ac.jp

説が実証されてきた (Kasser & Ryan, 2001; Sheldon et al., 2004)。また, Bradshaw et al. (2023)は将来目標と精神的健康との関連について, 92本の論文を用いてメタ分析を行い, 内発的将来目標は精神的健康と正の関連があること, また外発的将来目標自体は精神的健康と関連は見られないものの, 内発的将来目標よりも顕在化している場合は, 精神的健康を害する可能性があることを報告している。一方, Nishimura & Suzuki (2016)はアスピレーションズ・インデックスの日本語版をバックトランスレーションの過程を経て開発し, 人生満足感に対して内発的将来目標は正の関連を持つこと, 外発的将来目標は正負の関連が見られないことを報告している。

社会貢献目標

将来目標に関する研究では, 内発的将来目標と外発的将来目標の相対的な効果に注目しているが, それと同時に, 下位の将来目標も独立した効果を持つこともあり, 「内発と外発」という大きな枠組みに加え, 下位の将来目標に注目した研究も進められている。その中で, 学校・大学教育と親和性が高いものの一つが, 「社会貢献 (social contribution)」に関する目標である。

わが国には, これまで受け継がれてきた礼節を重んじ, 他者を思いやり, 互いに助け合って生活するという高い倫理観が国民性の中に存在しているが, この倫理観の育成を通して, 最終的には社会に貢献できる人材の育成が目指されている (文部科学省, 2017)。この社会貢献に重きを置く価値観というのは, 自己決定理論における社会貢献に関する目標 (以下, 社会貢献目標とする) の測定によって構成概念上, 表現されるものであり, キャリア教育の中でも, 子どもに育むべき目標の一つとして位置づけられている。

先行研究の課題と本研究の仮説

これまで自己決定理論における重要概念の一つである将来目標について述べ, さらにはその将来目標の中でも社会貢献目標に注目する意義について説明したが, ここで先行研究の問題点についても指摘しておく。それは, 社会貢献目標をはじめとする将来目標がどのような認知過程を経て個人の中で構成され得るのかといった観点が不足しているということである。これまでの理論研究では, 上述したとおり, 将来目標が人生満足感をはじめとする主観的幸福感や精神的健康

を予測するという説に立った検討が積み重ねられてきたが, そもそも将来目標に影響を与える要因の検討は不足してきたといえる。その中でも, 本研究が注目するのは社会貢献目標を形成し得る認知過程である。

そこで本研究では, 社会への信頼 (social trust) という心理構成概念を導入する。これはソーシャルキャピタル理論において注目されている概念の一つであり, Nishida & Yamauchi (2005)は, 他人や社会的組織に対する信頼を尋ねることによって測定できることを示唆している。そこで本研究では, Nishida & Yamauchi (2005) を参考に以下に示した13個の人・社会的組織への信頼を尋ねることによって測定することとした。それらは, 「家族」, 「近所に住んでいる, もしくは地域の人たち」, 「個人的に知っている人たち (友達や恋人)」, 「同じ大学に通う人たち」, 「初めて出会う人たち」, 「宗教活動をしている人たち」, 「自分と異なる国籍を持つ人たち」, 「警察の人たち」, 「裁判所の人たち」, 「日本政府」, 「国会議員の人たち (政治団体)」, 「公務員 (市役所で働いている人)」である。すなわち, 本研究では, 社会貢献目標は, 社会への信頼があつてこそ形成され得るものとして捉え, 上記の対象への信頼が総合的に高いほど, 社会貢献目標が高いという仮説を立てる。

以上の議論をふまえ, 本研究では社会への信頼から将来目標への影響を想定したパス解析モデルを作成し, 共分散構造分析を用いてこのモデルを検証する。

方法

対象

四国地方にある大学に通う大学生250名を対象とした。この調査対象者は著者の授業を受けている学生である。心理学研究における実証とは何かというトピックに関する授業の内容と関連させた上で, 調査は授業時間外に実施された。質問紙は Google Formを用いて作成された。調査協力者の性別による内訳は, 男子学生が105名, 女子学生が143名, わからないもしくは答えたくないと回答した学生が2名であり, 調査協力者の平均年齢は19.58歳であった。

調査の内容

社会への信頼 社会を構成する13個のグループおよび社会的組織に対して, その信頼の程度を4段階

(1 = まったく信頼していない, 2 = あまり信頼していない, 3 = ある程度, 信頼している, 4 = かなり信頼している) で評定してもらった。教示文は, 「ここでは, 社会を構成する様々なグループの人たちへの一般的な信頼についてお尋ねします。それぞれの対象に対して, みなさんがどの程度信頼しているかを教えてください。」であった。

将来目標 Kasser & Ryan (1993; 1996) のアスピレーションズ・インデックスを邦訳したNishimura & Suzuki (2016) の尺度を使用した。この尺度は, 自己決定理論で想定されている7つの将来目標を測定するものであり計32項目から構成される。詳細について, 内発的将来目標を構成する自己受容が4項目(例: 自ら, 自分の人生の生き方を選ぶことができる), 親密性の獲得が5項目(例: 頼りになる良い友人を持つ), 社会貢献が5項目(例: 慈善事業に時間やお金を提供する), 身体的健康が4項目(例: 身体的に健康になる), また外発的将来目標を構成する金銭的成功が4項目(例: 多くの高価なものを所有する), 外見的魅力が5項目(例: あなたの外見がいかに魅力的かが話題になる), 社会的名声が5項目(例: あなたの名前が多くの人々に知れ渡る)であった。5段階評定(1 = まったく重要ではない, 2 = 少し重要だ, 3 = やや重要だ, 4 = かなり重要だ, 5 = 非常に重要だ)による回答を求めた。教示文は, 「以下に書かれていることは, あなたの人生においてどの程度, 重要なことか, 教えてください。」であった。

手続き

調査協力者には, 回答は強制ではないこと, 個人のプライバシーは守られることなどが説明された。また, 研究の目的やデータの扱いについての説明がなされ, 授業の一環として実施されるものの, 研究協力の同意は個人に委ねられていること, およびその同意はいつでも撤回できることも説明された。以上の手続きによって研究倫理は遵守された。

統計ソフト

平均値と標準偏差, 信頼性係数の算出および相関分析はオープンソースの統計ソフトウェア環境であるR ver. 4.0.2を, 確認的因子分析とパス解析はMplus ver. 7.11を用いて行った。Google Formの機能によって回答ミスがある場合は, そのミスが指摘されるため, 250名の回答は欠測値を含まない完全回答データ

である。

結果

因子分析の結果

社会への信頼を測定する尺度の13項目に対して, 探索的因子分析を行ったところ, 固有値の減少推移は, 4.05, 2.06, 1.42, 1.20, 0.79, …, であり第4固有値と第5固有値の間に大きな落差が確認された。この結果をもって4因子解を採用することが推奨されると考えられるが, 項目数の少なさに起因する信頼性の問題などには慎重になる必要がある。また, 因子間の相関関係も互いに正の関係にあったため, 本研究は探索的な検討でもあることを考慮して, 社会への信頼を測定する尺度については1因子構造の尺度と見做して, まずは解析を進めることとした。なお, 4因子解の因子分析の結果(プロマックス回転後)をTable 1に示した。

アスピレーションズ・インデックスに対しては, 最尤法による確認的因子分析を行った。アスピレーションズ・インデックスに対する確認的因子分析の適合度は, $\chi^2(df=443)=1130.53(p<.001)$, CFI=.832, TLI=.812, RMSEA=.079, 95% CI = [.073, .084], SRMR=.085であった。これらの適合度指標は十分な値であったとはいえないが, 項目が30個以上あること(豊田, 1998, p.174), また各項目から対応する潜在因子への因子負荷量がすべて.40以上であったことから許容できる値であると判断した。

各尺度の信頼性の指標として, McDonaldのomega係数を算出した。その結果, 社会への信頼が.86, 将来目標の自己受容が.68, 親密性の獲得が.91, 社会貢献が.88, 身体的健康が.83, 金銭的成功が.82, 外見的魅力が.87, 社会的名声が.92であった。以上のように一定の信頼性が確認されたため, 以降の分析では, これらの加算平均得点をそれぞれ尺度得点として扱うこととした。Table 2には, 各尺度の平均値と標準偏差および相関関係を示した。なお社会への信頼と内発的将来目標との相関関係は.18, 社会への信頼と外発的将来目標との相関関係は.21であった。

仮説モデルの検証

本研究の仮説を検証するために, 潜在変数を伴うパス解析モデルを共分散構造分析によって検証する

こととした。まず、社会への信頼を表す潜在因子は、Table1に示した4因子を想定した探索的因子分析の結果を参照しながら、13項目すべてを使用して高次因子モデルを作成した。また、7つの将来目標についてはアスピレーションズ・インデックスの32項目から、それぞれ対応する潜在因子を作成した。次に、社会への信頼を表す潜在因子から、各将来目標の潜在因子に対してパスを想定した。すなわち、本研究では、観測変数は計45個、潜在変数が12個から構成されるパス解析モデルを検証することとした。

モデル全体の適合度は、 $\chi^2 (df=913)=1881.52$

($p<.001$), CFI=.824, TLI=.809, RMSEA=.065, 95% CI = [.061, .069], SRMR=.085であった。次に、社会への信頼から各将来目標へのパスについては以下の通りであった。まず、社会への信頼から自己受容に対しては、 $\beta = .030 (SE=0.095, p=.750)$, 95% CI = [-.156, .216], 親密性の獲得に対しては、 $\beta = .154 (SE=0.089, p=.085)$, 95% CI = [-.021, .328], 社会貢献に対しては、 $\beta = .401 (SE=0.074, p<.001)$, 95% CI = [.256, .545], 身体的健康に対しては、 $\beta = .029 (SE=0.089, p=.748)$, 95% CI = [-.146, .203], 金銭的成功に対しては、 $\beta = .185 (SE=0.084, p=.027)$,

Table 1 社会への信頼を構成する項目に対する因子分析の結果 (プロマックス回転後)

No. 項目	F1	F2	F3	F4
1 家族	.47	-.14	.06	.05
2 近所に住んでいる人	.28	.37	.06	-.05
3 個人的に知っている人たち (友だちや恋人)	.54	.02	.02	.00
4 同じ大学に通う人たち	.59	.33	-.02	.02
5 初めて出会う人たち	.22	.61	-.04	-.02
6 宗教活動をしている人たち	.01	.60	-.14	.08
7 自分と異なる国籍を持つ人たち	-.13	.75	.14	-.03
8 警察	.05	.02	.82	.02
9 裁判所の人たち	-.04	.00	.83	-.03
10 日本政府	.15	-.05	.16	.66
11 政党 (政治団体)	.05	.01	-.06	.95
12 国会議員の人たち	-.10	.02	.05	.91
13 公務員の人たち (市役所で働いている人など)	.03	.03	.64	.03
因子間相関				
F1		.29	.36	.29
F2			.14	.22
F3				.48

注) 太字にした数値は潜在因子に対して最も負荷量の高かったものである。

Table 2 各尺度の平均値と標準偏差および相関分析の結果

	平均値	標準偏差	2	3	4	5	6	7	8
1. 社会への信頼	2.55	0.34	.05	.14	.29	.03	.13	.19	.21
2. 自己受容	3.98	0.67		.49	.47	.63	.32	.27	.31
3. 親密性の獲得	4.24	0.76			.38	.59	.29	.30	.20
4. 社会貢献	3.04	0.86				.36	.30	.30	.46
5. 身体的健康	4.17	0.72					.29	.27	.20
6. 金銭的成功	2.64	0.77						.65	.51
7. 外見の魅力	2.37	0.82							.58
8. 社会的名声	2.02	0.76							

95%CI=[.021, .349], 外見的魅力に対しては, $\beta = .247$ ($SE=0.081$, $p=.002$), 95%CI=[-.089, .406], 社会的名声に対しては, $\beta = .291$ ($SE=0.079$, $p=.001$), 95%CI=[.136, .446]であった。

以上の結果から, 社会への信頼と将来目標との関連が明らかにされ, 社会貢献および外発的将来目標を構成する3つの下位目標が社会への信頼と正の関連があることが示された。なお, 5%水準で有意ではなかったパスを削除し, モデルの適合度を高めることはできたが, モデルの改善は本研究の主たる目的ではないため, それらのパスを削除せずに, このモデルを最終モデルとした。

考 察

本研究の目的は, 社会への信頼から将来目標に対する影響を想定したモデルを作成し, これら2つの変数の関連を明らかにすることであった。共分散構造分析を行った結果, 仮説通り, 社会への信頼は社会貢献目標に対して正の影響を与えていた。この結果から, 社会に対する信頼度が認知されればされるほど, 個人は社会に対して貢献しようとする目標を持ちやすいことが示されたと考えられる。またこの結果は, 教育の分野において社会貢献などの社会的に良いとされる価値を個人に育むことは大切ではあるものの, まずその前提として社会が信頼できるかどうか重要な視点であることを意味している。信頼に足る良い社会と認知されなければ, 個人の社会貢献目標の形成や促進は難しいものになってしまうのだろう。すなわち, 社会貢献目標の素地として, 社会への信頼が存在しているのである。

一方で, 外発的将来目標を構成する3つの将来目標, すなわち, 金銭的成功, 外見的魅力, 社会的名声に対して社会への信頼が正の影響を与えていたことは, 予測していない結果であった。これら3つの将来目標は, 自己決定理論においては基本的心理欲求を間接的にしか満たせない目標であり, 個人の精神的健康への貢献度は内発的将来目標と比べても低い(Ryan & Deci, 2017)。しかしながら, 外発的将来目標は内発的将来目標と比べると, 内容的には自己よりも他者(社会)に目を向けた目標ともいえる。金銭的に成功することや, 外見的な魅力を持つこと, また社会的な

名声を得ようとすることは, やはり社会への信頼があるからこそ, 生まれるものなのかもしれない。

以上の成果は得られたものの, 本研究は探索的な検討でもあり, 結果の再現性の検討は不可欠である。また一部の大学を対象とした結果であるため, 大規模サンプルによる追試研究が必要であろう。さらには, 社会への信頼に関する尺度については, その因子構造の検討を含め, 項目の内容についてさらなる改善が必要であると考えられる。自己決定理論における将来目標の形成要因に関する研究はまだ不足しており, 今後についてもさらなる理論ベースの研究が求められる。

引用文献

- Bradshaw, E. L., Conigrave, J. H., Steward, B. A., Ferber, K. A., Parker, P. D., & Ryan, R. M. (2023). A meta-analysis of the dark side of the American dream: Evidence for the universal wellness costs of prioritizing extrinsic over intrinsic goals. *Journal of Personality and Social Psychology, 124*(4), 873-899.
- Kasser, T., & Ryan, M. R. (1993). A dark side of the American dream: correlates of financial success as a central life aspiration. *Journal of Personality and Social Psychology, 65*(2), 410-422.
- Kasser, T., & Ryan, M. R. (1996). Further examining the American dream: Differential correlates of intrinsic and extrinsic goals. *Personality and Social Psychology Bulletin, 22*, 280-287.
- Kasser, T., & Ryan, M. R. (2001). Be careful what you wish for: Optimal functioning and the relative attainment of intrinsic and extrinsic goals. In P. Schmuck & K. M. Sheldon (Eds.), *Life goals and well-being: Towards a positive psychology of human striving* (pp. 116-131). Göttingen, Germany: Hogrefe & Huber.
- 文部科学省 (2017). 新学習指導要領
- Nishide, Y., & Yamauchi, N. (2005). Social capital and civic activities in Japan. *The Nonprofit Review, 5*(1), 13-28.
- Nishimura, T., & Suzuki, T. (2016). Aspirations and life satisfaction in Japan: The big five personality makes clear. *Personality and Individual Differences, 97*, 300-305.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination

theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55(1), 68-78.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. New York: Guilford Press.

Sheldon, K. M., Ryan, R. M., Deci, E. L., & Kasser, T. (2004). The independent effects of goal contents and motives on well-being: It's both what you pursue and why you pursue it. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30(4), 475-486.

豊田 秀樹 (1998). 共分散構造分析 [入門編]: 構造方程式モデリング 朝倉書店

(2023年10月17日受稿, 2023年11月24日受理)

Social trust facilitates social contribution goals: A proposed model by self-determination theory

NISHIMURA Takuma⁽¹⁾

The present study tested hypothesized model that social trust can serve as the basis for social contribution goals based on self-determination theory. In total, 250 university students (105 males, 143 females, and 2 unknown) participated in a questionnaire survey consisting of items asking about trust in society and the scale of future goals (Aspirations Index). The results of the structural equation modeling using a path analysis model with latent variables confirmed a positive association between social trust and social contribution goals. On the other hand, the model also showed a positive association between social trust and extrinsic future goals, which was not predicted by a perspective of self-determination theory. The results suggest that while fostering social trust may promote aspirations of contributing to society, it also has the secondary effect of enhancing extrinsic aspirations, suggesting the need for further theoretical testing. Although some advanced discussions on the theory remained, this study concluded that trust in society exists as the foundation for social contribution goals.

Keywords : self-determination theory, aspirations, social contribution goals, social trust, university students

⁽¹⁾Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University